

ダウンバースト（前編）

漆

（前略）

視界で、祝宴の垂れ幕のように鮮やかな桃色の何がたなびいた。そこへ夕方のつむじ風が押し寄せ、砂埃と共にシチロージの大振りの羽織をはためかせて通り過ぎていった。つむじ風は同様にその桃色の物もバタバタとなびかせて行った。それは、ひとりの男の長い髪であった。

「ボ、ボウガンのあにい…」

三人はばつの悪そうな顔でたちまち大人しくなってしまう。ボウガンと呼ばれた新手の男ははずけずけと近付いて来る。

（桃色の髪…？）

印象的なほどに鮮やかな桃色の髪に細い顎、鼻頭を覆う黒い細帯、そして腰には、ボウガンという呼び名にもかわからず、地面を引きずろうかという太刀を佩^はいている。どこか遠く遙かな彼方で、シチロージの記憶があつと声を上げた。

ボウガンはシチロージには全く目もくれず傍らを通り過ぎる。男達が道を空けた。

「何ちんけなことやってんだ。御前や若の命令なしに町の人間に手を出すんじゃねえ」

「でも、あにい。こいつきつと癒しの里の奴だぜ」

「勝手にこんな所に上がってきたのに違えねえ」

「詮議して懲らしめて…」

男達は言い訳がましい言葉を口々にまくし立てたが、ボウガンは一蹴した。

「俺たちにそんな権限はねえ。そんなことばかりやってると叩き出すぞ」

面目ねえとしおれる手下を引き連れて、ボウガンは立ち去ろうとした。その背中に向かってシチロージの口から言葉が漏れた。

「ハナカケ：か？」

ボウガンの肩がびくりと痙攣し、立ち止まる。遠巻きにしていた群衆から一旦は漏れた小さな安堵の溜息がたちまち緊張に包まれた。

髪の色と同じに染めた衣装がゆっくりと振り返り、腕組みをしてこちらを見つめる。シチロージもそれ以上は言わなかった。藤色の羽織の裾がパタパタと音を立てて沈黙を埋めた。

ややあつて、ボウガンの方から歩み寄ってきた。

シチロージの真ん前に立つと、やはり無言でじっと瞳を覗き込む。そして、ようやくニヤリと口の片方をゆがめてみせた。

「驚いたぜ、こんな所で戦さに出会うとはな！」

「覚えていたか」

ボウガンは頷く代わりに鼻当てをした顔を突き出し、なおもシチロージの瞳を覗き込んだ。

「勿論だ。この瞳の色。あの時俺たちが船を駆っていた空の色とおんなじだと思つたもんよ。それと、忘れるもんか、サムライ、あの悪所落としを」

「お前の知り合いか？」

先刻から様子を見守っていた笠懸けの小男が声をかけてきた。

「ああ、ずいぶん昔の話だがな」

ようやくシチロージから目を離すと、ボウガンは手下の方に向き直った。

「おめえら、俺が通りかかって命拾いしたな」

「でもあにいい、昔はサムライだったかも知らんが、今じゃこの有様だぜ。小洒落た羽織なんぞひっかけて芸妓とへらへらやってんだ。何てこたあねえよ」

「その目は節穴か？左腕が目に入らんらしいな」

言われて一同はシチロージの左腕に目をやった。長い袖に見え隠れしていた鋼鉄色にようやく気が付き黙り込む。

「いつからその腕なのかは知らんが、おそろく、今も鈍なまつちやおらんだろう？」

「…さあな」

旧知の視線を再び受けて、シチロージは曖昧な答えを返した。返事を避けているわけでは無論ない。だが、目の前の男と出会った時のことやその後のことが、全てが一瞬のうちに押し寄せ、何をどう捌さばいて良いか途方に暮れたのだ。

（さっきこいつは、こんな所で戦さに出会うとは、と言った。まさにその通りだ）

かつて在って今ここにないもの——それは戦さだ！

辺りはすっかり夕暮れ色に染まっていたが、どこ

からか射し込む光が眩しくて、シチロージは軽い目眩を覚えた。

シチロージの内に生じた動揺が通じたかのようにハナカケの声が聞こえた。

「これから一杯やるんだが、後であんたも一緒にどうだい？」

驚く仲間を無視して続ける。

「お互いこんな所でこんな境遇で出会ったのも何かの縁だろうぜ。昔話も悪くねえと思うが？」

「そうだな…」

シチロージは言葉を濁した。語りたくないことばかりのように思えたのだ。この男とのこと以外は。

「今世話になってる店のこともあるしな」

蜚屋を引き合いに出して、気が進まないことを誤魔化そうとする。

「無理にとは言わんき。かつてのサムライってのは

何かと大変だからな」

ちよつと哀れむような色を見せてから、ハナカケは声をひそめた。

「夜更けなら、この下の階層の『狸寝入り』って店にいたると思うから、気が向いたら遠慮なく来てくれ」
言い終わるやいなや相手の返事も聞かずに、ハナカケはくるりと身を翻した。

「てめえら、行くぞ」

ひと声かけると、そのまま後も見ずに立ち去った。

雑踏の中へと紛れていく影から、笠男の声が聞こえてくる。

「おい、悪所落として何だよ」

「悪所落としては悪所落としさ。俺たち水軍にとつち

や、超一級ダウンバーストの下降噴流よ」

「分からねえ」

「分からなくて良いさ。あん時のこたあ、この俺に

も理解不能なんだから」

「ますます分からねえ」

「ふふふ…」

声が聞こえたわけではなかったが、シチロージにはハナカケが笑ったように感じられた。そしてそれは、カンベエの含み笑いを思い出させた。

あの時カンベエは笑いを含んだ顔をこちらへ向けて、いつもの如く「行け」と合図したのだった。

(カンベエ様！カンベエ様！)

階層を二つ降りて現在の住まいである螢屋へ向かう間、他の言葉は浮かんでこなかった。